



角川文庫

— 48 —

倉田百三

出家とその弟子

ロマン・ロラン序
阿部次郎解題



角川書店



角川文庫

出家とその弟子



昭和二十六年八月二十日 初版発行
昭和四十二年十一月三十日 五十五版発行
昭和四十六年三月三十日 改版九版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

著者 倉田百三

発行者 角川源義

印刷者 橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三 株式
会社 角川書店

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

新興印刷・本間製本

倉 田 百 三
出家とその弟子

ロマン・ロラン序
阿 部 次 郎 解 題

本書は著者ならびに著作権継承者の了解を得て、現代表記法により、原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひらかなに改めた。

(編集部)

序

ロマン・ロラン

ここに紹介する作品は、「欧亜」^{ユーラシア}芸術界の最もみごとな典型の一つで、これには西洋精神と極東精神とが互いに結びついてよく調和している。この作品こそキリストの花と仏陀の華^{はな}、すなわち百合と蓮の花である。現代のアジアにあって、宗教芸術作品のうちでも、これ以上純粋なものを私は知らない。

現在、^{よわ}齡四十の作者が名声を得たのも、ひとえに一九一七年に書かれた出世作たるこの劇作によるものであった。一身上に起こった重大な試練や、愁傷おくあたわざる諸事情、疾病^{しつぺい}などは、作者をして時代の悲劇にかかりをもたせるに至った。作者は死の相の下におかれて、絶えず自殺の気持につきまといわれていた。絶え間なく眼前に浮かぶ、みじめにもまた恐ろしい人間の姿に悩み苦しむ状態を描いたこの「序曲」は、今なお上記の痛ましい暗い陰を宿している。

しかし、フィレンツェの詩人^{*}を、地獄のさまざまな圈を経て光明の天上界へ導いて行った優しいヴェルギリウス^{*}と同じく、温良寛容な師匠親鸞^{しんらん}は迷える弟子^{でし}たちの手を引いて、弥陀^{みだ}の光、「浄土」へと向かわせる。倉田百三はこの聖人の足跡を思い起こして、これを他に示しつつおの

が魂の悩みを解き、おのが魂とともに、不安と混迷とにおちいる幾多の魂を救った。『出家とその弟子』は数年にして百版を重ね、日本を靈的生活の清涼深遠な源泉に目ざめさせた。

作者が選んだ主人公は、日本の「黄金聖人伝」^{レジャンド・ドレ}にしろされている聖像中の一人物で、その伝記は正身実録の伝記である。親鸞聖人（一一七三——一二六二）⁽¹⁾は、十三世紀に、日本仏教のうちでも最も重きをなす一派、すなわち真宗を開いた。京都の近くに生まれ、公家の出であった親鸞は、その師匠にあたる法然^{ほうねん}の入滅以後、人間と無限との間に立つ温厚な執成者となって天を地に近づけ、万人を仏陀の恩沢に浴させ、全愛をもって神となし、信徒の魂には愛に全幅の信頼をかくべきことを説いた。絶望の淵^{ふち}に沈む暗澹^{あんたん}たる不安の時代に、厭世^{えんせい}思想からさえ救いの歓喜と平安とをわき出させた……。この世は罪業の海である。生きとし生けるもの、いづれにも救われる資格がないのだ。救いは自力によつてなしとげられるものではない。救いは仏陀の愛によるものであり、そうあるべきものであろう。「南無阿弥陀仏……」（南無無量光明寿仏！）。このただ一つにして、しかも心に銘じて唱えられるこの名号^{みょうこう}のうちには、衆生^{しゆじやう}一切に対する愛、万人に対する宥恕^{ゆうじよ}、勇氣と誠心をもってする生の受諾、絶対の真理、普遍の平和というような精神の純然たる全功力^{くわくりき}が包容されている。それは地上にあつてすでに成仏することなのである。これこそは生前中に味得せられ、他人の上にも恩恵の及ぶ生きながらの救いである。これは選ばれた少数者の特権ではない。衆生に開放さるべきものである。仏陀は孤独のうちに、あるいはまた万巻の書に埋もれて浮き世を離れた生活を送つたのではなくて、その生涯は無常と煩惱^{ぼんのう}との地上を潤す水の流れのごときものであつたと親鸞は例をとつて教えつつ、みずから妻帯して一子をもうけていた。

弥陀の導きたもう信と愛との舟に一身をゆだねるほかは、他に施すべきすべがないのだ。

*

他力の不思議な本体の手に運命を託すというこのような大綱⁽²⁾には、その本体の慈悲にすぎるところが言外に含まれているのであるが、これは行動のためにも、芸術のためにも一つの危険をゆるす。こういえば、それがフラ・アンジェリコの壁画に花とほころびる生き生きとした久遠^{くおん}の微笑のような、安心立命の境地に達した静寂主義、すなわち道德上の無抵抗であるからだ、と人はおそらく懸念するかもしれない。

しかしそうなると、倉田百三が、その作品の前面に押し出すことができたし、また敬虔^{けいけん}な受諾のうちですら、なみなみならぬ力によって人を感動させる調子を百三に与えさせてもいるような、そこに含まれている他の要素を斟酌^{しんしやく}しないことになりはしまいか。

その主なる要素とは徹頭徹尾、十全の誠心である。これは単にこの悲劇の主人公、智徳ともにすぐれた親鸞の特質であるばかりでなく、まず最も頑^{かたくな}な人物をはじめとして、意志最も薄弱な人物から最も腐敗墮落した人物に至るまで、言いかえれば、——殿様に見捨てられ、病身^{あまごころ}で、自分をひどいことにならそうとして努めてひどいことをなし、旅に疲れた老齡の行脚僧、親鸞が冬の夜に、一夜の宿を請うた際、その杖^{つゑ}で打ちながら外へ追い出した手荒な浪人左衛門^{さゑもん}、——風の中の木の葉のように、いつも風の吹きまわしで翻弄^{はんろう}され、遊女に思いを寄せる年若い弟子で、蒲柳^{はりやう}の質の心優しい唯円^{ゆいえん}、——親鸞の道楽むすこで、親鸞に勘当され、父の臨終のきわまで、柔和な師匠から特赦を拒まれるかにみえたただ一人^{ひとり}の人物、善鸞^{ぜんらん}その人……の特質でもある。すべての

人物がひとしく誠心ある人で、偽善をきらう。——「偽善は人殺しよりも悪いもの」（第二幕本書八八ページ）で、仏の慈悲ですら、これは絶対に贖えられない。あがな……これこそは試金石であつて、これらの人物がどれほど疎遠に見えても、またどれほどひどく衝突しても、人物はここで本心に立ち返る。親鸞は怒りにたける左衛門に追い立てられ、打擲ちやうちやくされたその瞬間に、左衛門のうちにも、また万人のうちにもあるような悪から邪惡に至るまで、耐え忍ぶほどの真心から、左衛門その人の救いを思う。そしてこの師匠は、自他ともに「善人」と認めておのが精神の平安を乱さないために、偽って会心の樂觀主義を修行する人よりは左衛門のほうに親しみを覚える。凶暴な人間とおのれをすてた人間とを結ぶこの友愛の不思議な気持は、数時間のうちに、しかも睡眠中、ある不可抗力によつて乱暴な左衛門を起き上がらせ、雪の降りしきる屋外にはせて先刻追いやつた聖人を捜し、わが家に連れもどしてその足下にわびを入れさせるほどの光芒こうぼうをもつて左衛門の心を照らす。その後、左衛門の生涯は衆生しゅじやうさいど済度の弥陀にゆだねられることになり、左衛門は救われる。

この劇中、最も美しく、最も完璧な場面は、人間のはかない愛が仏の清く澄み切つた調和のうちに、涙にむせびつつ不安の声を聞かせるあたりである。好感の持てる弟子の唯円は無邪氣にも女に思いを寄せ、清純ではあるが、しかし恩愛の情に身を焼く。若いこの二人の逢瀬ふたりのあひまひには、絶望の淵に沈んだ愛情の切々なるものがある。この情事は僧房中に知れ渡り、上に立つ修行者一同はこれに憤慨して、厳格主義を持しつゝ罪の弟子の処罰と放逐を主張する。その間にはいつて仲裁の勞をとるのが老齡の師匠である。師匠はこれらの出家たちに、まず人間として持つべき愛情と

慈悲心とを思い起こさせて、その導師たるべきことから説き始める。それからその若い弟子とは、差し向かいでねんごろに弟子の懺悔^{さんげ}を聞くのであるが、弟子の動揺した心を兄のような気持でいたわり、まことの愛を説き明かすこの老人ほどに心根の美しく、また人の心を打つものはない。それというのも、師匠は弟子が人を愛し、また愛しすぎても少しもがめていないからである。そして、それではまだ十分人を愛することにはならない、と温情こめて納得のゆくようにさしている。かくて無我夢中の若い弟子には、——「おまえは自分の恋人をおまえの愛で傷つけてはならないのだよ……」(第五幕第二場 本書二二—二二三ページ)と老師匠に言われた意味が了解される。弟子は——人間の愛——与えると思ひ、得たいと思ふときと同じく、所有欲など利己心から出た愛の奥底に、今まで気づかなかった呪い^{のろ}が潜んでいることに気づいて慄然^{りっぜん}とする。そして仏の面影をたたえる老師匠は、この若き恋の弟子に、まことの愛を教える。すなわち愛とは相愛の仲にその焦点を持つもので、これより放つ光は十方に普く^{あまね}、そこにはなんの曇りもなければ、また何人をも排斥しない、と教える。「つまり、他を排斥することはゆるされぬ罪であり、まちがいだから」(第五幕第二場 本書二二—二二ページ)ということによる。——しかし私はこれらの思想を理に落ちた言葉で要約したが、この思想は、豊潤な情緒と量^{はか}り知れないこまやかさと、そして対話のしつとりと胸にしみわたる慎みのある清らかさと美しさとがあつてこそ、はじめてその全体の真価が生じてくる。私はここに——戯曲の域を越えた——劇詩宝玉集の一つを、また福音書の宝石箱のうちにも、一つの場所を占めるにふさわしい珠玉を認める。

老師匠がその所行によつて相も変わらず光明の高嶺におのれを持し得たとは思われない。とも

かく、老師匠には今なお登りつめねばならない他の諸行が残されている。生仏といわれる老齡の聖人ですら、今もって頂上をきわめつくしてはいなかった。どうしても最後の試練を踏み越えなければならぬ。万人に開かれてかくも広大なこの心のうちにさえ、「排他主義」と仏陀への不信というような、師匠がとがめた重罪は克服されていなかった。親鸞は氣持のすきんだ息子を少しもゆるしていない。むすこに対しては、いっそう厳格にならざるを得ないとみずから思う。それというのも、おそらく自分の氣持としては、なおさら許してやらねばならないし、また一方おのが門徒の手前、道徳上の本分のためには、おのが感情を犠牲にしなければならぬとも考えたからなのであらう。臨終の床について、はじめて親鸞は、蕩児とうじを呼びもどすことに同意する。ところが、せめて仏を信ずると言ってもらいたい旨をむすこにことばかけて頼んだ時でさえ、心もとないこの頼みに対してむすこ（救いにふさわしくない点まで父にふさわしいむすこ）は極端に実直すぎてその答えを拒み、今にも息を引き取る父親に対して、最後の氣やすめのことばを拒む――（それというのも、親鸞にとっては、仏を信ずることを拒むのは、救いを拒むことにもなるからなのである）――父は心に衝撃を与えられて、床にがつくりとうなだれ、絶望して今にも死のうとしている。しかし最後の瞬間には、明悟の道が開けて、淨福の微笑がその顔を照らす。仏陀の罪障赦免の指で、おおよそそぐわぬものをもって織り成された調和を親鸞は覺る……。

(*Ἐκ τῶν διαφερόντων καλλίστην ἁρμονίαν...*)

（種々の不協和なものから最良の調和を）



Das Schöne zum gù - ten
(Le beau pour le bien)

(善を目ざす美しきもの)

仏の慈悲と愛とは、寛大にも、人間の靈魂のみじめさと信仰の足りなさとを補うものである。弥陀を信じない人々でも、弥陀はこれを信用し給う。彼らは誠心の人たちであった。神はそれ以上にも求め給わぬ……。

そして臨終の師匠は変容して「光差す有り明けに淡く消え失せる月のような心で死んでいく……」(第六幕第二場 本書二二八ページ)

*

現代の作品を見渡して、芸術と宗教との二重の発現が、この段階で結合している作品はそう幾つもあるものではない。クロオデルの最も美しい悲劇のうちでさえ、芸術のために、常にその均衡が破られているように思える。しかしここでは、芸術の花が神々しい力をそなえている。ベートヴェンは、「善を目ざす美しきもの」という上掲の一節を残しているが、日本のこの芸術家は知らずにこの道をたどっていた。数年前、倉田百三は、私にくれた手紙で、次のような信仰告白をしている。

「自分は芸術家といわれ、あるいは学者と呼ばれると等しく、慈悲の下僕と呼ばれんことを願うものである」と。

そして百三は現代の知識人や耽美主義者の魂の「ひややかさ」に反対して立ち、人々の心のうちに、「精神の深くして真摯な訴えを、巖のごとく、それと対立させる」ところに自分の「使命」が存すると言い切っている。そし

てさらに付言して、「神のまことの教会とともに、全地の諸上善人がともに相会するところを創設すること、そこにわれわれの勤めがあるものと信ずる」と言っている。

日本における詩情豊かな世代を通じて、道德と宗教とに對してかような熱意に燃えているのは、百三一人だけではないのだ。二十数年来、白樺派しらばなの「新理想主義」は、それ以前に王座を占めていた自然主義や、新浪漫主義に對して魂の權利を要求し、これを取り返した。⁽³⁾この流派の詩人たち——および武者小路実篤、有島武郎とともに長与善郎、倉田百三、吉田絃二郎らの先驅者たち——はトルストイに影響され、東洋と西洋との宗教的靈感を受けた。こうした人たちはキリスト教の精髓と仏教の精髓とを綜合して、「愛・慈悲アモール カリタス」のこの二宗教とギリシア主義精神との間に調和を得ようと夢想した。⁽⁴⁾現在、この人たちは社会上の是非なき義務と個人主義の正当な權利とをいかに調停するか、という点に努力をはらっている。四海同胞といい、人類の精神的協調といい、これがその人たちの芸術と行動との理想なのである。そして日本の芸術家の若き世代——詩人、画家、彫刻家、評論家ないしエッセイスト——と私とは個人的につながりがあり、私はほとんど父親の立場におかれていると申してもよく（つまりこの点、私の年齢がそうさせているし、私の愛情もまたそうさせている）、こうした人たちは十年ないし十五年このかた、世界の知識人のうちで、私の知るかぎりでは最も世界主義的な思想の精華の一つをなしとげている。

自由と純粹との美しいこの理想主義グループ(5)の長兄にあたる倉田百三は、一同の先頭に立って、手紙に書いてよこしたとおり、「革命の旗よりもさらに赤く、さらにめざましい——靈魂の赤旗をなびかせて」進んで行く。——それは愛と認識との火花であり、——やがてはそれが……この

点が懸念される——（ではなぜ懸念されるかといえ、それが英雄の道だからであるが）——やがてはそれが一同の血の花ともなり、人類の融和へ、——弥陀の「浄土」へとこの人たちが行く道を飾るべきものともなるのである。

注

この「序」は松尾邦之助、ステイニルベル・オベルラン共訳になるフランス版『出家とその弟子』（Hyakuzo-Kurata: Le Prêtre et ses Disciples, traduit du japonais par Kuni Matsuo et Steini-Iber-Oberlin. Les Editions Rieder 1932）に寄せられたロマン・ロラン「序文」（Introduction）の全訳である。ロランはここで原作者倉田百三のことばを幾つか引用しているが、もとよりこれは仏訳からの引用であって、これを原作と比べると、その表現には多少の相異、補筆と省略とが認められる。今これをふたたび邦文に移しかえるにあたっては、つとめて原作に合わそうとしたが、地の文の訳と直接続き得ぬところもあったので、おかしなことは知りつつも、ここに引用されている書簡と同様、仏訳文そのままを邦文に移すこととし、原作との参照を願うために、各引用文末尾にはそれぞれ本書による該当箇所を示しておいた。

以下の「注」はすべてロマン・ロランがフランス人読者を考慮して付したもので、われわれには必要でないものも幾つかあるけれども、倉田百三およびそのグループが海外に紹介された経路を知る上に便宜かとも考え、そのままここに写しておいた。

なおこの「序文」を翻訳するにあたっては、かつて仏訳上梓じようしの際、ロマン・ロランから直接これを得られた松尾邦之助氏の御快諾をいただいたこと、片山敏彦氏からは御懇篤なる御教示ならびに御配慮を

賜わったこと、また上掲ベートヴェンの短いメロディーが服部龍太郎、勝見勝両氏により、ベートヴェンの晩年一八二五年彼が死ぬ二年前の五十五歳のときに書きなぐった小曲カノンの主題で、輪唱として扱うのにふさわしく美しい旋律だと判明したこと、さらにまた翻訳に伴う出版上の手続きについては、ロマン・ロラン友の会およびみずす書房編集部の小尾俊人・高橋正衛両氏の御助力を仰いだことなど、これらのかたがたの御厚情に対し、この場所を借りてお礼を申し上げておきたい。——訳者

(1) この劇作の仏訳者の一人E・ステイニルベル・オベルラン氏の名著『日本仏教諸派』(E. Steini-ber-Oberlin: Les sectes bouddhiques japonaises, Orès, 1930)を手にとつて読まれんことを読者諸氏にお勧めする。同書には、高僧、教理および現代日本における諸派がまれに見る洞察力をもつてしるされている。

(2) これが日本精神の無二の傾向だと考えるのは戒むべきことである。いな、それどころか、これとはまったく対蹠的な日本仏教のもう一つの大宗旨「禪」があり、これは個人の努力、すなわち自力に訴えて往生を願う力強い行き方である。

(3) 内山貞三郎『日本文学における新理想主義』(雑誌《Das Junge Japan》東京一九二四年七月号)参照。

(4) これは倉田百三の数ある論稿中の一題名である。『希臘主義と基督教主義との調和の道』。なぜならば倉田はただ作家だけにとどまる人ではないからである。その著作の重要な部分はみずからの体験に基づいた論文集や哲学・倫理学関係の講演集にある。そのうち最も有名なものが『愛と認識との出発』である。

数ある劇作のうち、ヨーロッパ諸国語に翻訳され、刊行された二作品しか私は知らない。三幕物の喜劇『七夕祭』(雑誌《Das Junge Japan》一九二四年七月——十月号所載)と、もう一つアイス

キュロス流の宿命観を持った陰惨な感じのする悲劇『俊寛』（英訳されて上梓）のこの二つである。
（5）これらの人たちのうちから、詩人として尾崎喜八、上田秋夫、吉田泰司、片山敏彦、高村光太郎、
今井武夫、宮本正清、木村太郎および彫刻家の高田博厚の名をあげておこう。

増田良二訳

目次

序

ロマン・ロラン 三

出家とその弟子

一七

序曲

二〇

第一幕

三〇

第二幕

三七

第三幕

四〇

第四幕

四三

第五幕

五一

第六幕

五五